

アプロディーテとアルテミス

——チェーザレ・パヴェーゼ『レウコとの対話』の検討(2)——

中 島 梓

序

作家チェーザレ・パヴェーゼ (Cesare Pavese, 1908–1950) による『レウコとの対話』(原題 *Dialoghi con Leucò*, 1947) には、ギリシャ神話を題材にした 27 篇の対話が収められている。

パヴェーゼという作家やその作品についてまとめたロベルト・ジリウッチ (Roberto Gigliucci) は、パヴェーゼが描く神話の世界に登場する様々な女神のなかでも、アプロディーテとアルテミスはとりわけ特別な存在であり、両女神は女のあらゆる魅力的で並外れた特徴を集約したアイコンのような存在として作品のなかに描き出されている、と述べている¹⁾。

他方、パヴェーゼ作品におけるアポロンの要素とディオニューソスの要素を分析し、パヴェーゼ作品全体をつらぬく二元論について論じたカテリーナ・ラニエーリ (Caterina Ranieri) によれば、パヴェーゼが描くアプロディーテは、デーメーテルやペルセポネーであり、また、アルテミスやミネルヴァでもある²⁾。

さて、実際にパヴェーゼが描いた『レウコとの対話』に目をむけてみると、そこには神々や英雄など、多くの「男」とともに、女神やニンフ、魔女、死すべきものなど、数多くの「女」が登場している。しかし、その数多くの「女」のなかで、対話者によって語られる対象として作中に取り上げられている女神は、アプロディーテとアルテミス、この両女神のみなのである³⁾。ギリシャ神話には他にも多くの女神が登場するにもかかわらず、なぜ多くの女神のなかからアプロディーテとアルテミスのみが語られる対象として作中に取り上げられたのか。パヴェーゼは、両女神に何を見出そうとしたのだろうか。

『レウコとの対話』という作品は、対話形式が用いられており、神話的題材をもとにしているという点で、他の一連のパヴェーゼ作品とは異質なものとして位置づけられる。また、この作品には、パヴェーゼ自身が『レウコとの対話』執筆当時夢中になっていたとされる、神話学や民俗学研究の影響が、色濃く反映されているとの指摘がなされている。しかし、その中身は、描き方や内容など、多くの面でパヴェーゼ自身のその他の詩や小説作品などとも関連し合っている⁴⁾。

したがって、パヴェーゼが『レウコとの対話』に描くアプロディーテとアルテミスをここで改めて分析し、パヴェーゼの神話世界における女神について考察を行うことは、たんに『レウコとの対話』という作品を理解する一助になりうるばかりでなく、パヴェーゼの文学作品全般における「女」を理解する一助にもなりうるのではないかと考えられるのである。

そこで本稿では、以下に述べる手順にそって、パヴェーゼが描くアプロディーテとアルテミスの分析を行う。まず第一節では、『レウコとの対話』において、アプロディーテについて語られる対話にも、アルテミスについて語られる対話にも、ともに死すべき女ヘレネーが登場しているという点に目をむける。そのうえで、続く第二節では対話「波の泡」を取り上げ、アプロディーテとヘレネー

との関係性について考察する。第三節では、対話「一族のなかで」を取り上げ、アルテミスとヘレネーとの関係性を考察する。さらに、アルテミスについては、「野獣」と題された対話においても語られるものとして取り上げられていることから、第四節において対話「野獣」を取り上げて、引き続きアルテミスについての分析を試みる。その結果、『レウコとの対話』のなかで、ヘレネーを介してアプロディーテとアルテミスがいかに描き出されているのかを明らかにする。

1 『レウコとの対話』作品ノート——「語られる者」から見えてくるもの——

パヴェーゼが描くアプロディーテとアルテミスについて分析を始めるまえに、まずは両女神が一般にいかなる女神として捉えられてきたのかを把握しておく必要があるだろう。しかし、ギリシャ神話に登場する女神の起源や特徴については、各時代、各地域において諸説あるため、それらをここで逐一挙げることは不可能である。ただし、世界中で人々にとりわけ広く親しまれていると考えられ、またパヴェーゼ自身も、当然、目を通していたヘシオドスやホメーロスの作品⁵⁾に目をむけてみると、およそ次のようなものとして捉えることができるだろう。

アプロディーテもアルテミスも、ともにオリンポス12神に含まれる。アプロディーテは美と愛を司る女神として見なされている。その誕生神話をめぐっては、ヘシオドスの『神統記』に記されたような、海に投げ入れられたウラノスの性器から生じる、泡立つ精液から生まれた女神という説、あるいは、ホメーロスの『イーリアス』に記された、ゼウスとディオネの娘であるとする説などが知られている。

他方、アルテミスは林を支配する狩猟の女神であり、処女神として、時には月の女神として知られている。ゼウスとレートーの娘で、アポローンとは双子の関係にある、あるいは、デーメーターの娘であると語られている。

ではパヴェーゼ自身は、アプロディーテとアルテミスを一体どのように捉え、どのように『レウコとの対話』のなかに描き出したのだろうか⁶⁾。その手がかりを得るためにも、まずは対話篇の巻末にある、作者ノートに目をむけてみたい。

パヴェーゼが『レウコとの対話』の執筆に際して書き記し、対話篇出版時に同時収録された作者ノートを見ると、各対話において、対話者らがいったい誰について語っているのかを、表のようにしてまとめた箇所がある。また、対話篇自体を見ると、「神々」と題された対話を除くすべての対話に、序文と対話者二者の名前が記されている。これらをもとに、各対話で、いったい誰が、誰について語っているのかをまとめてみると、表1のようになる。

表1を見ると、『レウコとの対話』において語られるものとして登場する女神は、複数形で記されているムーサイを除くと、アプロディーテとアルテミスのみであることがわかる。アプロディーテは、「波の泡」と題された対話にのみ登場し⁷⁾、アルテミスは、「野獣」と「一族のなかで」、これらふたつの対話に登場している。また、ギリシャ神話におけるアルテミスはローマ神話におけるディアーナと同一視されている。そのディアーナもまた、語る者として「湖」のなかに登場している。

また、アプロディーテが登場する唯一の対話「波の泡」と、アルテミスについて語られるふたつの対話のうちの一つ「一族のなかで」、これらふたつの対話のなかに、語られるものとしてヘレネーの名が挙がっているということにも気づかされる。

【表1】

題	語り手		語られるもの			
			神	女神	男	女
雲	ネベレー	イクシーオーン	神々(ティータン)			
怪物	ヒッポロコス	サルベードーン	神々(キマイラ)		ベレロポーン	
盲	オイディプス	テイレシアス				
雌馬	クトニオのヘルメース	ケンタウロスのケイローン	アポローン		アスクレーピオス	コローニス
花	エロス	タナトス	アポローン		ヒュアキントス	
野獣	エンデュミオーン	よそ者		アルテミス		
波の泡	サッフオー	プリトマルティス		アプロディーテ		ヘレネー(女たち)
母親	メレアグロス	ヘルメース				アタランテー
二人	アキレウス	パトロクロス			幼子	
道	オイディプス	乞食	運命(スピックス)			
断崖	ヘーラクレース	プロメーテウス	神々(ティターン)			
慰めえぬもの	オルベウス	バッキー				エウリディケ
人狼	第一の狩人	第二の狩人			リュカーオーン	カリストー
客人	リテュエルセース	ヘーラクレース				
炎	羊飼いの父	羊飼いの息子			アタマース	
島	カリュプソー	オデュッセウス				
湖	ウィルピウス	ディアーナ			ヒッポリュトス	
魔女	キルケー	レウコテアー			オデュッセウス	
雄牛	レレクス	テーセウス				アリアドネー
一族のなかで	カストル	ポリュデウケース		アルテミス	アトレイデース	ヘレネー
アルゴー船員	イアーソーン	メリテー				メーデイア(女たち)
葡萄畑	レウコテアー	アリアドネー	ディオニューソス		テーセウス	
人間	クラトス	ビアー				
秘儀	ディオニューソス	デーメーテル			イカリオス	エーリゴネー
洪水	獣神サテュロス	木の精ハマドリュアス			人間	
ムーサイ	ムネーモシユネー	ヘシオドス		ムーサイ		
神々	—	—	神々			

ヘレネーは、一般には絶世の美女でありトロヤ戦争を引き起こすきっかけとなった女性として知られている。このヘレネーが、『レウコとの対話』の中で語られる対象となっているのは、「波の泡」および「一族のなかで」のみである。すると、死すべき女ヘレネーを介して『レウコとの対話』におけるアプロディーテとアルテミスの分析が可能ではないか、ということが考えられるのである。

ところで、パヴェーゼが、宗教学や民俗学、人類学などの研究の中でもっとも影響を受けたとされる、カール・ケレーニイ(1897-1973)が残した膨大な研究論文のなかに、「ヘレネー誕生」と題された小論がある。この小論では、ヘレネーという死すべき女のなかに見受けられる、アプロディーテ的側面とアルテミスの側面に関しての、時代ごとの変遷がたどられている。以下、その説明を追ってみる。

ケレーニイは、ヘレネーが『イーリアス』の前史をふくむ『キュプリア』において、大女神ネメシスとゼウスの間に生まれたたぐいまれなる美女であり、人類にとっての災いであった、と記している。海では魚の姿で、陸では動物の姿でゼウスの手から逃れようとしたネメシスが、ゼウスと結実し、そこにヘレネーが生まれた。そしてこのネメシスこそが、原女性的なものであり、その姿や容貌は、もとはアプロディーテと接触していたのである。

他方、娘のヘレネーとはいえば、それは明らかにアルテミスの特徴を持っていた。また、ネメシス自身、その形姿はアプロディーテと接触していながらも、アルテミスとも関連付けられ、その徴として、鹿と有翼とからなる冠を頭に戴いていた。ここに、ネメシスにおける原女性的な本性として、アプロディーテ的なものとアルテミスの的なもの、二柱の神が存在することになるのである。

ところが、『イーリアス』のなかでは、ヘレネーはゼウスの娘であり、彼女の母親については言及されていない、とケレーニイはいう。『イーリアス』では、ヘレネーはむしろアプロディーテと結びつくことにより、ネメシスとの結びつきからは完全に解放される。アプロディーテは女主人であり、

ヘレネーは奉仕する女である。この点で、ホメーロスのヘレネーの形姿は象徴的だといえる。また、ネメシスカアプロディーテか、これこそが女性の美の極端な可能性であるとケレーニイは述べる。ネメシスとヘレネーの神話の変遷は、メネシスの娘に留まって、罪意識の源泉から人類を罰するために立ち上がるか（アルテミスの）、あるいは重い無関心な女主人に仕えて、アプロディーテの純粹な、無垢の光輝を、自分のものとして、また、死すべき人間の悲劇的な運命として担うかである、とケレーニイはこの小論をまとめている⁸⁾。

原女性的姿であるネメシスと、アプロディーテとアルテミスとの関連、そして死すべき女ヘレネーにおけるアプロディーテとアルテミスとの関連を論じた、1937年に書かれたこの小論は、パヴェーゼが『レウコとの対話』に描き出したヘレネーや、アプロディーテ、アルテミスなどにも影響を与えているかもしれない。いずれにせよ、パヴェーゼはヘレネーを介して、アプロディーテとアルテミスをいったいどのように描き出したのだろうか。

まずは「波の泡」を取り上げて、ヘレネーとアプロディーテをめぐる描写の分析を行ってみることにする。

2 ヘレネーとアプロディーテ —— 「波の泡」分析——

「波の泡」は、ニンフのブリトマルティスと、かつてギリシャに存在したとされる女流詩人サッフォーを対話者とする、「悲劇的な性」がテーマの対話である。1946年1月12日から19日にかけて執筆されたとされる本対話は、「ティータンの世界×不正な神々」という枠のなかに分類され、第7番目の対話として作品に登場する。

「波の泡」の際立った特徴、それは、対話の中に男の名が一切登場しないという点であろう。対話者はともに女である。そして、対話者は次々に女の名を取り上げて、悲劇的な女たちの生について語ってゆく。他方、男の名は、単に偶然登場していないというわけではない。むしろ意図的に排除されているのである⁹⁾。

ところで、「波の泡」の対話者は、どちらもかつて海へ身を投げた女であり、今はともに波の泡として存在しているという共通点を持つ。また、この対話のなかで語られるものが、女神アプロディーテと人間ヘレネーであることは、作者ノートの中に明らかにされている（表1）。語られる対象となった両者には、絶世の美女であり、幾多の愛人の名が連ねられ、幾多の災いが引き起こされたという共通点がある。

「波の泡」に付された序文は、次のとおりである。

ミノス王に愛されたクレタ島のニンフ、ブリトマルティスについては、カリマッコスが語っている。サッフォーがレスボス島のレズビアンだと語ることは、不快な事である。我々は、海に、このギリシャの海のなかに自ら身を投じることを決意した彼女のやるせない人生を、より悲しく捉えたい。この海は、島にあふれており、そのもっとも東にあるキプロスは、波にのってアプロディーテが降り立った島である。幾多の愛と深刻な惨禍を目にした海。アリアドネーや、パイドラ、アンドロマケ、ヘレ、スキュラ、イオ、カッサンドラ、メーデイアなどの名前を今さら挙げる必要などあるのだろうか。それらみながこの海を渡り、何人かはそこに留まっ

た。精液と涙にまみれた海のことを、思わないではいられない。¹⁰⁾

カリマッコスが語ったブリトマルティスの物語とは、簡単にまとめると、次のようなものである。山野を愛したクレタ島のニンフ、デュクトウンナ（網の婦人の意）は、彼女を愛したミノス王の手から逃れようと山野を駆け抜け、崖から海へと身を投じた。その後、獵師の網に引っかかり、ブリトマルティスという名でギリシャに広まった¹¹⁾。

サッフォーをめぐっては、同性愛者であったらしいということや、若い男との恋に破れ、海に身を投げたらしいということなど、実に様々な逸話が残されている。そのサッフォーを、パヴェーゼが本対話のなかでより悲しく捉えてみたいと記している点は、注目に値する。

また、アリアドネー、パイドラ、アンドロマケ、ヘレ、スキュラ、イオ、カッサンドラ、メーディアらは、いずれもギリシャ神話に登場する、悲劇的な生を歩んだ女たちである。

語られるものであるアプロディーテについては、悲劇を生きた女たちが身を沈めた、精液と涙にあふれている海の、最も東にあるキプロスに降り立った女神として紹介されている。一方で、この対話のなかで、アプロディーテと同じく語られる者として登場するヘレネーについては、序文のなかでは一切言及されていない。

続いて、語る者ブリトマルティスおよびサッフォーが、対話のなかでどのように語られているのかを見ていこう。

ブリトマルティスとサッフォーによって繰りなされる対話の中では、両者が海に身を投げ、今は波の泡に姿を変えた存在であるという、両者の共通点について語られている。しかしその共通点のなかに、両者の決定的な差異が浮き掘りになっている。

ブリトマルティスは、「すべてが海のなかで死に、そして生き返るのよ」と語り、自分自身の今の姿を受け入れている。それに対してサッフォーは、波の泡である自分の姿を受け入れることができない。目の前に広がる海の、恐ろしいばかりの退屈さを嘆くばかりだ。

こうした両者の差異は、『レウコとの対話』全体を通してしばしば登場する「微笑み」という用語をめぐっても、明白に表されている。

「微笑み」という言葉は、『レウコとの対話』のなかで神々と人間を分かつものとして機能しており、「死」や「宿命」という言葉と同様に用いられている。ニンフのブリトマルティスは、「微笑み」が何を意味するのかをよく知る存在であるのに対し、サッフォーには「微笑み」が何を意味するのかわからない。対話のなかでブリトマルティスは、微笑むことは自分自身を受け入れることであり、他を受け入れることだと説明する。それに対しサッフォーは、「宿命を受け入れるものなど誰もいない」と答えるのである¹²⁾。

海に身を投げ、波の泡に姿を変えたという点は同じでありながらも、宿命を前にして対比的に描き出されるブリトマルティスとサッフォー。この両者によって、対話中盤、ようやくヘレネーについて語られる。

対話者ふたりの理解しあえない関係が描き出されるなか、自分自身の姿を受け入れることができないサッフォーに対し、ブリトマルティスは、「欲望と喧騒のなかで心穏やかに暮らす死すべき女に、おまえは出会ったことがないのか」と問いかける。それに対しサッフォーが答える。

サッフォー： ひとりも……。おそらくいるわ……。サッフォーのような死すべき女では

ない。あなたがまだ山のニンフで、わたしはまだ生まれていなかった頃。ひとりの女が、死すべき女が、この海を渡った。そしてつねに喧騒のなかで、おそらく心穏やかに、生きた。まるで女神のように、いつも自分自身と等しくありながら、人を殺し、破壊し、盲目にした、ひとりの女が。おそらくは微笑むべき何も持たなかった。彼女は美しかったし、愚かではなかった。彼女の周りでみなが戦い、そして死んだ。彼女の名が、ある瞬間結びつき、あらゆる者たちの生や死に、その名を与えることだけを願いながら、みなが戦って、そして死んでいったのよ、ブリトマルティス。みなが彼女のために微笑んだ。あなたは知っているわね、レダの娘、ヘレネー・テュンダレーオスを。¹³⁾

サッフォーとは異なるタイプの唯一の女性として、ここでヘレネーの名が挙げられている。そして、みなが彼女のために微笑んだにもかかわらず、彼女自身は微笑むべき何も持たず、ただ喧騒のなかで心穏やかに生きたと語られている。

これを聞いたブリトマルティスは、ヘレネーが果たして幸せな女性だったのかどうかを問いかける。それに対してサッフォーが答える。

サッフォー： 彼女は逃げなかった、これは確かなことよ。自分自身であるということで充分だった。彼女の運命が何であるかなど尋ねなかった。彼女を望んだ、十分な力を持つ者が、彼女を連れ去った。彼女はひとりの英雄に10年間従った¹⁴⁾。みなが彼女を彼から取り返し、別の男と結婚させた¹⁵⁾。この男もまた彼女を失い、海を越えて多くの者たちが彼女をめぐる対立し¹⁶⁾、二番目の者が彼女をふたたび取り戻し、彼女は彼とともに平和に暮らして、埋葬されたのだが、冥界においてもなお、彼女は別の男たちと知り合った。誰をも偽らず、誰にも微笑みかけなかった。おそらく彼女は幸せだった。¹⁷⁾

ここでは、ヘレネーという女が、自分自身であるということに満足し、誰からも逃げず、誰をも偽らず、誰にも微笑みかけることなく生きた女として語られている。

こののち、再びブリトマルティスとサッフォーとのあいだで、悲劇的な生を歩み、最後には海に身を沈め、海の野獣となった女たちの話が続けられる。アプロディーテについて語られるのは、そうした女たちをサッフォーが嘆く直後の、「波の泡」最終局面においてである。

ブリトマルティス： でも、テュンダレーオスは無傷だったとあなたは言ったわ。

サッフォー： 火事と破壊の種を撒き散らして。彼女は誰にも微笑まなかった。誰を偽ることもなかった。嗚呼、彼女こそが海にふさわしい女なのよ。ブリトマルティス、この下から誰が生まれたか覚えているわね？

ブリトマルティス： 誰のことを言いたいのか？

サッフォー： あなたが見たことのない島がまだあるの。朝がやって来るときに、最初に朝陽に包まれる島が……。

ブリトマルティス： 嗚呼、サッフォー。

サッフォー： 名もない女が、あそこで泡から現れ出た。胸を締め付ける不安に駆られながら、ひとり微笑む女が。

ブリトマルティス： 彼女は苦しまない。偉大な女神なのよ。

サッフォー： 海の中で不安にもがくものすべてが、彼女の養分であり、彼女の呼吸なの。あなたは彼女をみたことがあるの、ブリトマルティス？

ブリトマルティス： 嗚呼、サッフォー。それを言わないで。わたしはしががないニンフに過ぎないのだから。

サッフォー： ということは、あなたも見たのね。

ブリトマルティス： 彼女のまえでは、女たちはみな逃げるのよ。それについては話さないで、いい子だから。¹⁸⁾

以上をもって、本対話は終わる。

その名は最後まで明らかにはされないものの、序文、あるいは対話中の「泡から現れ出た」という表現などから、ここで語られている偉大な女神かつ名もなき女がアプロディーテであることは、明らかだろう。

ブリトマルティスによって、「彼女の前では女たちはみな逃げるのよ」と語られる点、〈海〉から生まれたアプロディーテについて、悲劇的な生を歩んだ女たちの不安や苦しみを糧とする存在として語られている点から、アプロディーテもまた、波の泡や海の野獣になった女たちとは異なるタイプの女として対話のなかで語られているといえるだろう。

しかしながら、サッフォーやブリトマルティスら悲劇的な生を歩んだ女たちとは、異質な存在であるという点で共通しているヘレネーとアプロディーテのあいだにも、決定的な差異が存在する。ヘレネーは誰にも微笑みかけない女であると説明されるのに対し、アプロディーテはたったひとりで微笑みを浮かべる女として語られているのである。

本対話前半部分で、ブリトマルティスは、微笑むこととは宿命を受け入れ、自分自身を受け入れることであり、また、他を受け入れることであると語っていた。

すると、死すべき女ヘレネーは、何をも受け入れず、しかし誰からも逃れることなく満足に生きた女として捉えられる一方で、アプロディーテは、ただ一人ですべてを受け入れる存在であり、なおかつ、愛の不安を糧とする女として描き出されているということがいえるだろう。したがって、「波の泡」における対話者と語られるものに関しては、次のように区分することができる。

【表2】

語るもの（逃げる / かつて逃げた）		語られるもの（決して逃げない）	
微笑みを理解する	微笑みを理解しない	微笑みかける	微笑みかけない
ブリトマルティス	サッフォー	アプロディーテ	ヘレネー
（不死）	（死すべき者）	（不死）	（死すべき者）

第一に、語る者と語られる者とのあいだに差異がある。語る者、すなわちブリトマルティスおよびサッフォーは、ともに逃げることによって海に身を投げた女であるのに対し、語られる者は、決して何からも逃げることのない女である。「逃げる」（= fuggire）という言葉をめぐり、語る者と語られる者の差異が、「波の泡」のなかに明確に描き出されている。

第二に、「逃げる」あるいは「逃げた」という点で共通する対話者二者のあいだにも差異が見られる。ニンフであるブリトマルティスが、微笑みとは何であるかを知り、宿命を受け入れる女である

のに対して、死すべき女サッフォーは、微笑みが何を意味するのかがわからず、宿命を受け入れることができない。

第三に、何からも逃げないという点では共通する、語られるもの、つまり女神アプロディーテと死すべき女ヘレネーのあいだにも、差異が存在する。アプロディーテがひとりで微笑みを浮かべる女であるのに対し、ヘレネーは決して微笑むことのない女である。

死すべき者であるサッフォーおよびヘレネーは、微笑みが何を意味するのかがわからず、微笑みかけることもないのに対し、不死の者であるニンフのブリトマルティスと女神アプロディーテは、微笑みを受け入れ、一人微笑みを浮かべるものとして描かれている。つまり、『レウコとの対話』にたびたび登場する「微笑み」(= sorriso) や「微笑みを浮かべる」(= sorridere) という言葉をめぐり、「波の泡」のなかで、死すべき者と不死の者との差異が明確に描き分けられているのである。

ところで、再び表1に目を向けてみると、アプロディーテが27篇ある対話のなかで唯一「波の泡」にのみ登場する女神であるのに対し、「波の泡」のなかでアプロディーテと同じく語られる者として設定されたヘレネーは、「一族のなかで」と題された対話にも、語られる者として登場していることがわかる。また、「一族のなかで」においては、語られる者として女神アルテミスの名も挙げられている。

「波の泡」では、誰からも逃れることなく、誰にも微笑みかけることのなかった女として語られていたヘレネーは、「一族のなかで」という対話では一体どのように語られているのだろうか。また、アルテミスについてはどのように語られているのだろうか。

3 ヘレネーとアルテミス——「一族のなかで」分析——

「一族のなかで」は、語る者としてヘレネー、およびその兄弟にあたるカストルとポリュデウケースが取り上げられており、語られるものとして女神アルテミス、アトレウスの一族の男たち、ヘレネーが取り上げられた対話である¹⁹⁾。1946年2月21日から24日にかけて、全27篇の対話中10番目に着手されたとされる本対話は、「人間の救済と困惑する神々」という枠の中に収められ、結果的には対話篇20番目に登場する。対話はポリュデウケースが抱く疑問にカストルが答えるというかたちで進行する。

「一族のなかで」の序文は次のとおりである。

アトレウスの一家を不幸にした痛むべき出来事については知られている。ここでは、数世代について思い起こすだけで充分だろう。タンタロスからペロプスが生まれ、ペロプスからテュエステースとアトレウスが生まれ、アトレウスから、メレアグロスとアガメムノンが生まれた。そしてこの最後の者から、母親を殺したオレステースが生まれた。アルカディアと海の女神アルテミスが、この一族の中で特別な信仰の対象になっていたであろうことについて、これを書くものが確信したのは（父親によって犠牲にされたアトレウスの一族であるイーピゲネイアを考えてみればよい）、昨日のことではない。²⁰⁾

(下線は筆者による)

タンタロスから始まり、何世代にもわたって肉親殺しを行った一族の名が、ここに列挙されている。しかし、次々に一族の名が挙げられていく一方で、序文の中では、「波の泡」と同様に、語られる対象であるはずのヘレネーについては、一切触れられていない。

しかし、肉親殺しを行った一族のなかで、アルテミスが特別の信仰の対象となっていたのであろうということを、ずいぶん前からパヴェーゼが確信していたということが記されている点は興味深い。また、従来は狩猟の女神として山野を支配するイメージが持たれるアルテミスに対し、単にアルカディア²¹⁾の女神であるとのみ記されるのではなく、海の女神であると記されている点も、パヴェーゼ独特のアルテミス観が示された部分であるといえるのではないだろうか。

続いて対話部分に目を向けてみる。先に検討した「波の泡」において、サッフォーがヘレネーについて語った内容、すなわち、ヘレネーが数多くの男性の手に渡ったという事柄が、本対話のなかでも取り上げられている。ただし、「波の泡」ではヘレネーについて語る際に意図的に伏せられていたテーセウスら男の名前は、「一族のなかで」においては明らかにされている。カストルは、

…アトレウスの一族と、彼らの父祖たちは、つねに同様の女と結婚した。おそらく我々彼女の兄弟も、ヘレネーがどういう女なのか、今なおよくわかっていない。その見本を僕らに与えるために、テーセウスが望まれた。そのあとには、アトレウスの一族の者がきた。²²⁾

と説明する。テーセウスに続く「アトレウスの一族の者」とは、メネラオスを指す。

「一族のなかで」において、カストルは、ヘレネーこそがまさにアトレウスの一族にふさわしい女であるということを語っている。アトレウスの一族は、つねに同じような女、冷たく残酷な目を持つ女を求めてきた。自分たち兄弟にとってはまだ幼い少女のように見えるヘレネーも、実はそのような残酷な目を持つ女であるとカストルは述べている。最初のうちはその話をなかなか受け入れられない、ヘレネーの無垢で純真な面を信じ込むポリュデウケースではあるものの、対話が終盤に至る頃には、アトレウスの一族が求める、冷たく残酷な目をヘレネーが持っているということを認めるのである。

本対話では、ヘレネーとアルテミスのほかに、肉親殺しを行うアトレウスの一族についても語られている。いやむしろ、ヘレネーやアルテミスについてよりも、アトレウスの一族がどのような一族であったのかということの説明が、対話の大半を占めているといってよい。その内容をまとめると、次のようになる。

アトレウスの一族は、家から出ることがなく、高地から命じることを愛する、海の王の一族である。城塞に暮らし、海の支配者でありながらも、城塞の隙間からのみ海を眺める一族であり、彼らのなかで最初に世界を見た者は、息子を食卓に供したタンタロスであった。

タンタロスののち、アトレウスの一族は、女たちや多くの黄金とともに、疑い深く、不平を抱きながら、有益な振舞いもできぬままに、貧しい地のうえで海から養分を得て暮らす。宴を催し、身を太らせて山のうえで閉じこもって過ごすうちに、次第に強く、ほとんど野生のような存在を探し求めるようになった。

そして実際に、彼らをつねにそれを見つけてきた。自分たちを鞭打ってくれる、冷たい、人殺しの、伏せられることのない目を持った女に出会うことを望み、実際にこれまでも、そうした女を得てきたのである。

アトレウスの一族が求めてきた女たちについて、カストルはペロプスの妻ヒッポダメイアやアトレウスの妻アーエロペーを例に挙げながら、「一族の妻となつてしばらくすると残忍になり、不安を抱き、血を流したり、流させたりする」と語っている。

肉親殺しを行つてきた一族が求める女たちとは、一体どのような女たちなのかについて説明がなされ、ようやく対話の最終局面を迎えるにあたり、

カストル： 彼らは残忍な処女を望んでいる。山の上を歩き回る処女を。彼らが結婚するどの女も、彼らにふさわしいこうした女だ。彼らはその女のために息子らの肉を捧げ、彼らはその女のために、娘らの喉をかき切った……。²³⁾

と語られる。この場面でカストルが意図する女が処女神アルテミスであるということは、すでに確認した序文や作者ノートからも明らかだろう。肉親殺しを行う一族は、残忍で、流血を好む、山の上を歩き回る処女神アルテミスのような女を求めている。そして、一族にまさにふさわしい女として、ヘレネーが本対話中に取り上げられているのである。

さらに、「一族のなかで」における対話内容を見れば、作中に海が異様なかたちで取り上げられていることにも気づかされる。対話のなかで主題的に取り上げられたアトレウスの一族については、城塞に身をひそめる海の支配者だと語られていた。そのアトレウスの一族が信仰するのは、山の上を歩き回る処女神アルテミスである。アルテミスについては、序文のなかで、アルカディアと海の女王であると記されていた。すると、「一族のなかで」において語られるものとして設定されていたヘレネーは、海の支配者であるアトレウスの一族にふさわしい、アルカディアと海の女神であるアルテミスのような女として、描かれているということになる。

先に「波の泡」を検討した際、そこに登場したヘレネーは、決して逃げることのない女であるという点で、女神アプロディーテとともに、他の女たちとは異質な女として描かれていた。そのヘレネーが、「一族のなかで」では、女神アルテミスと類似した女として語られている。

他方、「一族のなかで」では、語られるもののひとりとして女神アルテミスが取り上げられていながらも、対話中、アルテミスについて触れられる部分のごくわずかである。この対話からは、アトレウスの一族がどのような女を求めてきたのかということに関する説明を通してしか、アルテミスについて把握することができない。

しかし、『レウコとの対話』という作品全体に目をむければ、アルテミスは「野獣」と題された対話にも登場していることが、表1からもわかる。「野獣」においては、語られる者はアルテミスのみである。また、そこでは対話者のひとりが、かつて実際にアルテミスを目の当たりにした場面について語っているのである。

4 アルテミスについて——「野獣」の分析——

語る者としてエンデュミオンとヘルメースが、語られる者としてアルテミスが設定された対話「野獣」は、「神のかつ性的な夢」と、「神々の不公平」が、そのテーマとなっている。1945年12月18日から20日にかけて執筆され、全27篇の対話中、実に2番目に着手されたとされる本対話は、

「ティータンの世界と神々の悪意」という枠に収められ、結果的には作品の第6番目に登場する。

まずは、「野獣」の序文を見てみよう。

エンデュミオンとのアルテミスとの恋が肉体的なものではなかったことを、我々は納得している。もちろん、このことは両者のうちの熱心ではない方が、血を流すことを強く望んだということを、——まったく違ふと——否認するものではない。——野獣たちの女主人であり、怪物に満ちた地中海の、言葉で言い表すことができない神聖な母らの森のなかからこの世界に現れ出た——純潔の女神は、甘美な性格でないことが知られている。同じく、男が眠れないときに眠ることを望み、永遠に眠る者として後世へと伝わっていることもまた、知られている。²⁴⁾

(下線は筆者による)

ここでは、アルテミスが野獣たちの女主人であり、怪物に満ちた地中海の、神聖な母らの森からこの世界に現れた女神であるということ、また処女神であり、甘美な性格ではなかったということが、説明されている。

続いて対話部分に目を向けてみる。すると、先に見た「一族のなかで」と同様、そこには語られる者として設定されているはずのアルテミスの名が出てこないばかりか、対話者エンデュミオンが、「その者は名を持たない。あるいは、たくさんの名前があることを、わたしは知っている」と語っているのである。エンデュミオンは、さらに次のようにも語る。

エンデュミオン： あなたは今までに一度でも、ひとつのもののなかに多くのものを抱えている人物を知っているか？ 自分自身とともに多くのものを伴っているあらゆる仕草、あなたが彼女をめぐる行方あらゆる考え、大地や空にある尽きることなき事物、あなたが決して知ることのない過ぎ去った日々やこれから待ち受ける日々、言葉や追憶、必然性、そしてあなたが所有することを許されていない別の大地や空をも含んでいる、そうした人物を知っているか？²⁵⁾

つまり、ここで語られているアルテミスは、多くの名前を持つとともに、多くのものを内包する存在である。

「野獣」という対話の最も興味深い点、それは、実際にアルテミスを目にしたエンデュミオンによって、アルテミスの姿が語られている点であろう。

先に見た「一族のなかで」では、アルテミスはあくまでアトレウスの一族の信仰の対象であり、アトレウスの一族がつねにアルテミスと類似する女を望んできたということが説明されていた。ここでは、彼らが望み、実際にこれまでに得てきた女らの姿を通して、アルテミスが間接的に説明されていたにすぎない。

しかし、「野獣」では、エンデュミオンがアルテミス自身に実際に出会った夜の様子が語られる。なおかつ、そこでは「女神」という言葉は用いられず、「人物」や「娘」などの言葉を用いてアルテミスについて語られているのである。その場面に目を向けてみよう。

ある夜、ラトモス山で夜更けにエンデュミオンは切り株にもたれ眠っていた。そして月の下で目覚めたとき、その女はいた。

エンデュミオンはまず、アルテミスの目について語る。その目はいくぶんいかがわしく、黒目がちで、澄んだ、じっと動かぬ目をしていた。

続いて、彼女が閉ざされた微笑を浮かべてあいさつをしてきたこと、また、エンデュミオンの方から近づいていくと、膝まで届かぬ服を着ていた彼女がためらいがちに髪に触れてきたこと、彼女が信じられないような致命的な微笑を浮かべたその瞬間、エンデュミオンは地面に倒れたこと、などが語られる。

その女は、猛獣であるとともに、目しか持たない、やせ細った野生的な少女のようであった。そして、「おまえは決して目を覚ましてはならない」、「決して動いてはならない。再びおまえに会いに来よう」と言い残し、草地のほうへと消えていった。女の声は、まるで海の水のような、少ししわがれた、冷たく、母のような声であった。

エンデュミオンは、アルテミスを実際に目にしたこの晩を境にして、自分自身がもはや死すべき者らのなかで生きることがないということ、自分は人間のなかの一人ではないということを知ったのだった。

エンデュミオン： 嗚呼よそ者よ、わたしは彼女のすべてを知っている。わたしたちは語りに語ったのだから。わたしはいつも眠っているふりをして、人が雌獅子や、沼の緑色の水、あるいはより我々に近く、心の中に持っているものに触れはしないのと同様に、決して彼女の手に触れはしなかった。聞いてくれ。わたしの前にいたのだ——ひとりの痩せた娘が、微笑むことなく、わたしを見つめて。その大きく澄んだ目は、別のものを見ていた。別のものをなおも見ていた。それらが、こうした事柄だ。これらの目の中には、果実と野獣がある、悲鳴が、死が、そして残酷な石化が。わたしは流された血を、八つ裂きにされた肉を、むさぼり食われた大地を、孤独を、知っている。彼女にとって、野生とは、孤独である。彼女にとって野獣とは孤独だ。彼女の愛撫は、人が犬や木の幹にするような愛撫だ。だが、よそ者よ、彼女はわたしを見た、じっと見つめたのだ、短い上衣をまとい、痩せた娘が、まるであなたがあなたの国で見たものと同じような娘が。²⁶⁾

対話終盤における上記に挙げた語りのなかでも、その目についての言及がなされている。アルテミスの目のなかには、果実と野獣、悲鳴、死があること、また、そうした野生や野獣は、孤独そのものであるということが説明されており、そのなかにアルテミスが抱え持つ獐猛さや残虐性を見出すことができるのである。

また、処女性および母性という矛盾する主題をアルテミスのなかに見出せるということが、「誰も膝に触れることはない」という言葉や、「しわがれた母なる声」という言葉が用いられた、以下に示す箇所から明らかだろう。

エンデュミオン： 嗚呼、道行く神よ、彼女の甘美さは、まるで夜明けのようだ、そして明るみに現れた大地や空のようだ。神性なものだ。だが他のものにとっては、事物や野生にとっては、野生のものである彼女は、東の間の笑みと、絶滅させる命令を抱える。誰も、彼女の膝に触れたものはいない。

よそ者： エンデュミオン、あなたの致命的な心の中で、あきらめるのだ。神も人間も、彼女に触れはしない。しわがれた母なる彼女の声こそ、野生のものが与えることができるすべてである。²⁷⁾

エンデュミオンが語るアルテミスの描写と、先にみた「一族のなかで」におけるアルテミスの描写、これらを重ね合わせると、『レウコとの対話』のなかで、アルテミスは次のように描き出されているといえるだろう。

第一に、膝まで届かぬ衣服をまとった少女のようだと描写され、誰も触れることができないと語られていることから、パヴェーゼが描くアルテミスには、処女的側面が見出せる。また、アルテミスそのものが野獣であるとともに、山野や野獣を支配してもいる。こうした点は、従来考えられているアルテミス像と類似している。

そして以下が、パヴェーゼ自身によって従来のアルテミス像に独自に付加されている、もしくは、さらに強調されて描き出されていると考えられる点である。

つまり第二の特徴として、エンデュミオンによって「野生とは孤独である」、「野獣とは孤独である」と語られていることからわかるとおり、アルテミスが孤独な存在であることが、作品のなかで強調されている。

また第三に、パヴェーゼが描き出すアルテミスは、流血を渴望する女神である。確かに、アルテミスが残忍で獰猛な性格を有しているという点については、すでに広く親しまれているギリシャ神話のなかのいくつかの挿話に目をむければ明らかではある。しかし、パヴェーゼが描き出す場合には、アルテミスが「流血」を渴望する女神であるということが、「一族のなかで」のカストルの対話を見ても明らかなおと、特に強調されているのである。

第四に、アルテミスは致命的な目を持ち、致命的な微笑を浮かべる。『レウコとの対話』のなかで語られる女神は、複数系で取り上げられるムーサイラを除くと、アプロディーテとアルテミスのみである。アプロディーテの目については語られることがなかったものの、アルテミスの目については、「一族のなかで」や「野獣」において、対話者が再三にわたり語っている。また、微笑という用語は、「波の泡」の分析の際にすでに触れたとおり、死すべき者と不死の者とを分かち重要な要素として『レウコとの対話』のなかで機能している。互いに不死の者である女神アプロディーテと女神アルテミスは、ともに致命的な微笑みを浮かべる存在として、『レウコとの対話』のなかに描き出されている。

最後に、五番目の特徴として、野獣と山野を支配するアルテミスが、実は海にも関連している点が挙げられる。元来、アルテミスは山野や森林と関連する女神、あるいは辺境や境界線を支配する女神として考えられてきた。しかし、パヴェーゼは、「一族のなかで」の序文において、アルテミスアルカディアと海の女神として紹介し、「野獣」の序文では、怪物に満ちた地中海の、神聖な母なる森のなかから生まれた女神として紹介している。対話のなかでも、一般にはなかなかイメージされがたい、海の水のような母なる声を持つ女神であるということが語られており、海と母性とに関連づけてアルテミスを描きだしていることがわかるのである。

結びにかえて ——アプロディーテとアルテミス——

ここまで、「波の泡」、「一族にて」、そして「野獣」の三篇を取り上げて、『レウコとの対話』におけるアプロディーテとアルテミスに関する描写を検討してきた。

しかし実際のところ、アルテミスについては様々な特徴が浮き彫りになったものの、アプロディーテについては「波の泡」でしか語られる者として取り上げられておらず、さらには、その「波の泡」においてさえほとんど言及されてはいないために、パヴェーゼがアプロディーテをどのように捉え、描き出そうとしたのかを把握することは、実は非常に困難であった。

しかし、とりあえずここまで得たアプロディーテの特徴と、先に挙げたアルテミスの特徴とを対比してみると、次のようになる。

まず、両女神は孤独な存在として描かれており、互いに致命的な微笑みを浮かべ、海に関連するという点で、共通している。

「波の泡」のなかで、アプロディーテはただ微笑を浮かべる存在であると語られるだけでなく、「一人きりで」微笑を浮かべると語られている。この点に、アルテミスと同様、アプロディーテにも孤独という側面を見出すことができるだろう²⁸⁾。

また、アプロディーテが身を置く場所は、ニンフや人間の女らが最終的に身を沈めた海であり、他方アルテミスは、致命的な微笑を浮かべ、流血や死を与える存在として語られる。このことから、両女神と「死」との関連についても明らかである。

しかし、アプロディーテについては、精液と涙にあふれた海から生まれ、悲劇を生き、最後は海に身を沈めた女たちの、その愛の不安を糧として誕生したと序文のなかで紹介されていたのに対し、アルテミスについては、怪物たちが潜む地中海の、母なる森から生まれたと紹介されていた。さらには、アルテミスが海の水のような母なる声を持っているとも語られていた。この点に、両女神の決定的な差異を見ることができる。つまり、パヴェーゼが描くアルテミスは、処女性の象徴であると同時に母性の象徴をも担っている一方で、アプロディーテは、男女の「性」に密接に結びついていながらも、生命誕生という豊かさを伴うような母性的イメージを持ち合わせていない。アプロディーテは、処女性の欠如の象徴であると同時に母性の欠如の象徴でもあるという、アルテミスが抱え持つ矛盾する主題を相反するかたちで抱え持つ存在なのである。

処女性と母性とをめぐるアプロディーテとアルテミスの差異、それは「流血」という側面に着目することによっても明らかである。アプロディーテが誕生した海は、女たちが逃避の果てにたどり着き、身を沈めた場所である。その死には、「血」という要素が決定的に欠如している。他方、アルテミスは流血を、生贄を強く望む女神である。アルテミスが与える死は、血を流すことによって大地をより豊かにするという特徴を持っている²⁹⁾。

ところで、『レウコとの対話』において、アルテミスの母性的側面が海に関連付けられ描きだされているという点は、これまでのパヴェーゼ研究ではほとんど着目されることが無かった。しかし、実際にはパヴェーゼが考える「女」、あるいは「母性」というものを把握するうえで、きわめて重要な点なのではないだろうか。

元来、パヴェーゼが描く海については、永遠の繰り返しの象徴、不毛の象徴として捉えられてきており³⁰⁾、パヴェーゼの一連の作品に象徴的に描き出される丘や大地の描写にこそ母性的側面、女性的側面を見出すことができるといわれてきた³¹⁾。

しかし、このような見解に立った場合には、アプロディーテとアルテミスを単に対立的に描き出された女神とみなすことにつながってしまう。つまり、アルテミスを丘にのみ関連付け、「流血・処女性・母性」を担うものとして、アプロディーテについては海に関連付けて、「血の欠如・処女性の欠如・母性の欠如」を担うものとして捉えてしまうことになる。しかし、パヴェーゼはそうはしていない。

アプロディーテのみならず、アルテミスをもアルカディアと海の女神として説明し、一般には常に山野や森林がイメージされるアルテミスを、目立たないかたちではありながらも海に関連付けて描き出している。そして、アルテミスの身体的特徴が明らかにされる場面において、アルテミスには野性的な獐猛さが伴われ、その背景として丘が登場する(=「野獣」)。

アプロディーテとアルテミスは、処女性と母性という面では、一見すると明確に描き分けられているながらも、「海」という点に着目すれば、実は表裏一体の関係にあることがわかる。「海」に着目することにより両者の差異が明白になる一方で、「海」という点で、両者はつながっている。

つまり、ケレーニイがその論考で示したのと同様にパヴェーゼの『レウコとの対話』においても、アプロディーテとアルテミスの連続性を示すかのようにして死すべき女ヘレネーが登場しており、さらには「海」が、作中に取り上げられているのである。

注

- 1) Roberto Gigliucci, *Cesare Pavese*, Bruno Mondadori, Milano, p.61.
- 2) Caterina Ranieri, *Apollineo (Olimpico) e Dionisiaco (Titanico)* in Cesare Pavese, *Sotto il gelo dell'acqua c'è l'erba, omaggio a Cesare Pavese*, Alessandria, Edizioni dell'Orso, 2001, p.290.
- 3) 語られる対象にある女神については、アプロディーテとアルテミス以外に、ムーサイも対象となることが、作者ノートより明らかである。しかし、ムーサイはムーサの複数形である。固有名をもつ単独の存在として挙げられる女神は、アプロディーテとアルテミスのみである。
- 4) 先の論文「死者の世界としての〈海〉——チェーザレ・パヴェーゼ『レウコとの対話』の検討——」(『立命館文学』第622号)では、パヴェーゼが『レウコとの対話』に描く〈海〉の描写の特徴が、詩や小説で取り上げられた〈海〉の描写の特徴とも類似している点を指摘した。
- 5) パヴェーゼは自身の流刑期間中、多くの古典文学に親しんだ。この間にホメロスの叙事詩についても読んでいたことが、姉への手紙のなかにも記されている。また、『レウコとの対話』執筆時には、翻訳者として、自らヘシオドスの『神統記』を翻訳していた。これはのちに出版されている。
- 6) 先行研究においては、パヴェーゼが描くアプロディーテに言及したものは、ほとんど見当たらない。他方、アルテミスに関して言及した研究は多数見られる。ジョヴァンニ・カルテリは、『レウコとの対話』に描かれるアルテミスが、パヴェーゼの長編第一作に登場するコンチャであり、コンチャは、パヴェーゼが流刑囚として訪れたレッジョカラブリアの僻村プランカレオーネに実際にいた女、コンチェッタ・デルフィーノをモデルにしていると述べている (cf., Giovanni Carteri e Gaudenzio Nazario, *I gerani di Concia——Cesare Pavese e la Calabria: trapoesia e mito——Cittàcalabria edizioni*, 2005.)。カルテリは、パヴェーゼが、独立した存在かつ野生的存在であり、獐猛な性格をした女神としてアルテミスを描いていると述べている。
- 7) cf., 作者ノートによれば、語られるものとして明確にアプロディーテが挙げられているものは、「波の泡」のみである。しかし、「アルゴ船員」と題された対話では、アプロディーテがまつられた神殿を舞台にして対話が展開しており、対話者として登場する神殿娼婦メリテーに、アプロディーテの影響を見出せる。作者ノートには、「波の泡」と「アルゴ船員」のふたつの対話が、女たちについて語った対話であることが記されている。このふたつの対話に、ともにアプロディーテが関連している点は興味深い。
- 8) cf., カール・ケレーニー著「ヘレネー誕生」(『ギリシアの光と神々』円子修平訳、法政大学出版局、1987年、pp.1-20)。

9) cf.,「死者の世界としての〈海〉——チェーザレ・パヴェーゼ『レウコとの対話』の検討——」(『立命館文学』第622号)。

「波の泡」で、男性の名前が意図的に排除されていると考えられる点については、次にあげる対話中の2箇所の台詞から明らかである。

ブリトマルティス： カリュプソーは、ひとりの男のために自らを留めさせた。彼女にとって価値あるものなど、もはやなかった。何年も何年も、彼女は洞窟から出てこなかったわ。レウコテアー、カッリアニーラ、キモドス、オリティーア、みなが来たの。アンピトリートも来た、そして彼女に話したわ、彼女と一緒に連れて行き、救い出した。でも、何年もかかったわ、その男が去るまでに。

ここで語られるカリュプソーを留めさせた男とは、オデュッセウスのことである。しかし、ここでは本来登場すべきオデュッセウスの名が提示されておらず、ただ、ひとりの男として語られているにすぎない。また、中盤にはヘレネーについて説明された箇所がある。そこでもやはり、本来語られるべき男の名が明らかにされない。

サッフォー： 彼女は逃げなかった、それは確かなことよ。自分自身であるということでも十分だった。彼女の宿命が何であるかなど尋ねなかった。彼女を望んだ、十分な力を持つ者が、彼女を連れ去った。彼女はひとりの英雄に10年間従った。人々は彼女を彼から取り返し、別の男と結婚させた。この男もまた彼女を失った。海を超えて多くの者たちが彼女をめぐる対立し、二番目の者が彼女をふたたび取り戻した。彼女は彼と共に平和に暮らして、埋葬されたが、冥界においてもなお、彼女は別の男たちと知り合った。誰をも偽らず、誰にも微笑みかけなかった、おそらく彼女は幸せだった。

トロヤ戦争について語られたこのくだりには、本来ならばテーセウスやメネラオスなどの名が登場するはずであるにもかかわらず、そうした男たちの名が一切登場しない。名前が登場しないために、ややわかりづらい説明とも感じられるほどである。女たちの名前が「波の泡」に次々と挙げられる一方で、対話中に本来登場すべき有名な男たちの名前が一切登場しないという点は、「波の泡」という対話のひとつの特徴として挙げられるだろう。

10) Cesare Pavese, *Dialoghi con Leucò*, Giulio Einaudi editore s.p.a., Torino, 1999, p.45.

11) cf.,『世界名詩集大成 1 古代・中世』p.105.

12) *Dialoghi con Leucò*, p.49.

13) *Dialoghi con Leucò*, pp.48-49.

14) この英雄は、テイレシアースを指す。

15) 別の男とは、メネラオスを指す。

16) トロヤ戦争を指す。

17) *Dialoghi con Leucò*, p.49.

18) *Dialoghi con Leucò*, p.50.

19) cf., 本稿 131 ページ、表 1。

20) *Dialoghi con Leucò*, p.126.

21) アルカディアとは、古代ギリシアの南部ペロポネソス半島のツウ王丘陵地帯にあった土地であり、高山によって他の地方から完全に隔離された場所であった。

22) *Dialoghi con Leucò*, p.128.

23) *Dialoghi con Leucò*, p.130.

24) *Dialoghi con Leucò*, p.38.

25) *Dialoghi con Leucò*, p.40.

26) *Dialoghi con Leucò*, pp.41-42.

27) *Dialoghi con Leucò*, p.42.

- 28) ロベルト・ジリウッチは、一人きりで微笑を浮かべる女性であるという点を、パヴェーゼが描き出すアプロディーテの特徴として強調している。cf., Roberto Gigliucci, *Cesare Pavese*, p.163.
- 29) 流血を求める神については、『レウコとの対話』の中ではアルテミス他にディオニューソスにも当てはめられる。ディオニューソスとデーメーテルが人間の死と血について語る、「秘儀」と題された対話には、血によって物語を作り、死ぬことによって死に打ち勝って永遠のものになろうとする人間についてが語られている。
- 30) *Cesare Pavese*, pp.115-116.
- 31) *Cesare Pavese*, p.180.

(本学大学院博士後期課程)